

# 自分を解放することで 新しい自分に出会える

市民劇団  
雁坂組

「演劇をすることで、脳は活性化し、自分とは違ったもうひとりの自分を毎回発見することが出来ます」

そう語るのは、今年21周年を迎える市民劇団「雁坂組」の団長、大串清子<sup>おおしずか</sup>さん。雁坂組は、1988年、旧大宮市の公民館で開催された「シルバー演劇教室」の修了生有志で旗揚げしました。団員は30代から70代と幅広く、十数名がオリジナル作品に取り組んでいます。元俳優で、脚本・演出・演技指導を担当する雁坂彰



前列中央が雁坂さん、右端が大串さん、後列左から2番目が大萱生さん

さんは、「人は、常に新しいものや自分を持っている以上のものを求めるものです。一般的に男性は志向型の傾向が強く、女性性周囲に気を配りながらも集中力があるといわれています。お互いが影響し合い認め合ってつくり上げるのが演劇です」と指導に熱が入ります。

雁坂組が10月のさいたま市民演劇祭に向けて稽古しているのは、大萱生淑<sup>おおがゆと</sup>さんの戦争体験に基づいた朗読劇『母の肖像』。大萱生さんは、旧満州から引き揚げた体験があり、「戦争について、若い方により良く知っていただきたい。そして『平和が続きますように』という祈りを込めて原作を書きました。芝居を演じていても、最終的には自分が出てきてしまいますから、自分の生き方と正面から向き合うことが大切なのです」と語ります。稽古前、戦後生まれの若い団員に「無蓋<sup>むがいしや</sup>車」(屋根がない貨車)の説明をしていた姿が印象的でした。

「雁坂組の特徴は、生活感にあふれていること。オリジナル作品を演じることが多いのですが、身のまわりにある題材でなければ無理があるからです。台詞も日常生活から逸脱するような言葉は使いま



生涯学習総合センターでの稽古風景  
(第2・第4土曜日の午後1時30分から)

- 第9回さいたま市民演劇祭に出演  
10月25日(日) 市民会館うらわ
- 雁坂組ホームページ(団員募集中)  
<http://members2.jcom.home.ne.jp/karisaka/index.html>

せん。人は、自分を縛り付ける傾向があります。表現活動を通じて自分を解放すれば、新たな自分に生まれ変わることができるのです」

雁坂さんのこの言葉は、演劇だけに限らず、日常から離れて自分を解き放つ時間が人生には必要だということを伝えていきます。大串さんは、「元々は内気な性格でしたが、演劇を始めて積極的にいろいろな世代の人たちと出会えるのが楽しになりました。今は、若い団員からパワーをもらっています」と笑顔で答えます。他団員からも、「大声を出すことでストレスを解消できる」「舞台を体験して度胸がついた」などの声があり、新しい自分に出会っています。

20年間で38回の公演を実施し、現在も月2回の稽古を欠かさない雁坂組のモットーは、「楽しく演じること」。好きなことを仲間と一緒に続けている団員たちの表情は輝き、充実感に満ちあふれています。

## 広告スペース

この情報誌の作成費用の一部を広告料収入でまかなっています。



平成21年10月1日発行

【編集・発行】さいたま市市民局生活文化部男女共生推進課

〒330-9588 さいたま市浦和区常盤6-4-4 TEL.048-829-1231 FAX.048-829-1969 E-mail:danjo-kyosei@city.saitama.lg.jp

本誌へのご意見・ご感想は男女共生推進課まで。FAX、E-mail、ホームページでも受け付けています。